

バングラデシュ南部避難民支援事業

薬剤師 山地優依子

私は、2018年1月6日～3月22日まで、バングラデシュ南部避難民救済事業の第4班の薬剤師として派遣されました。昨年8月末の武力衝突から4班の活動終了時点までに、ミャンマーからバングラデシュに流入した避難民は、69万人にのぼりました。それ以前に避難してきた約20万人含めると、100万人規模となります。

日赤の医療活動は昨年9月より本格的に始まり、第1、2班時点では巡回診療を、第3班では巡回診療を継続しつつ、新たに建設された仮設診療所での診療活動が始まりました。活動開始から4カ月が経とうとしていた第4班では、①診療活動の安定化、②来るべき雨季への備え、そして③次班以降での活動移譲の準備、の3点がチーム全体の大きなタスクとなりました。薬剤部門として、上記3点について行った活動内容を報告します。

① 診療活動の安定化

まず、第4班の構成要員で薬局業務を円滑に行うことが出来るよう、薬の準備や調剤時の注意点をまとめた業務手順書を作成しました。薬剤師が帯同していない方のクリニックでは、日赤看護師が主に薬局を運営するためです。調剤・服薬説明は、日赤薬剤師または日赤看護師とコミュニティーボランティアで行いました。コミュニティーボランティアの調剤手技および用法説明は、第3班薬剤師の指導の甲斐があり、とても信頼できるものでした。ただ、医師の処方内容の確認や、服薬に際しての注意喚起については、薬剤師として積極的に行いました。特に医師に対しては、処方理由をメディカルレコードに明記するよう依頼し、薬剤選択の適正や処方の必要性に留意しました。薬剤師として当たり前の業務ですが、可能な治療行為が限られる状況下で、医薬品の適正使用を促すことは重要なことです。

また、医薬品および医療資機材の保管管理・調達は、基本的に第3班の方法を踏襲して行いました。活動開始当初は、日常業務の多さに驚き、一人で薬局を運営出来るのだろうかと不安でした。しかし実際には、一人でしたことは殆どない、といっても過言でない位、周りのスタッフがサポートしてくれました。翌日の薬剤準備と医療資機材の棚卸は日赤看護師さんにサポートを依頼し、予製(予め患者一人単位で必要な量に薬剤を分けておくこと)はアドミニアシスタントが手伝ってくれました。スリル満点のマ



コミュニティーボランティアと調剤・記録業務

ーケットでの買い出しは、ドライバーに付き合ってもらい、値切ってくれることもしばしばでした。沢山の方々のサポートを受け、優先順位をつけながら、薬局運営を行うことができました。

② 雨季への備え

第4班では、下痢性疾患対応病棟設立に向けてワーキンググループ(通称 GERI チーム)が生まれ、私もその一員として活動しました。職種ごとに分担して準備を進め、私はメディカルロジスティシャンとして、必要物品のリストアップを行いました。コレラのアウトブレイクを主な対象としているため、WHOのコレラキットの使用を前提とし、数量が少ないものや、追加すべき品目の名称・数量をリスト化しました。コレラキットの中身と、日赤の資機材の在庫を勘案し、コレラ救済事業の経験者に相談しながら作業を進めました。

③ 活動移譲に向けた準備

次班以降、活動をバ赤に移譲することを見据え、薬局業務を誰に引き継ぐのか、また現在の業務内容が現地のニーズに合っているのかを検討するために地元診療所2か所のアセスメントを行いました。いずれの診療所でも、主に看護師が調剤業務および服薬説明を行っていました。また、日赤診療所よりはるかに多くの薬を扱っており、一回に患者さんに渡す薬の量も多いことが分かりました。ただし、どちらの診療所でも薬の供給や在庫管理は自分たちで行っているのではなく、他の人道支援団体が担っていることも分かりました。



地域の診療所へのアセスメント

このアセスメントを受けて、薬局業務を移譲する対象はバ赤看護師とし、次班で引継ぎを開始することとなりました。また、処方薬の種類や処方量の見直しについては、薬の供給体制を検討した上で変更していくこととなりました。他施設と自施設の業務内容を比較することで、必要性和継続性を検討しながら、活動内容を見直していくことの重要性を学びました。

7週間の活動を通して最も喜びを感じたことは、患者さんやコミュニティーボランティアさんとの距離が近づいた瞬間です。当初は、交代でやってくる外国人を受け入れてくれるのかとても心配でした。しかし私の心配とは裏腹に、コミュニティーボランティアさんたちは仕事の合間に、彼らの文化や習慣、言語を私達日赤スタッフに教えてくれました。そして逆に日本について知ろうと、色々な質問をしてくれました。お互いの事を知ること、距離が縮まり、チーム力がアップしていくのを感じる日々でした。また、彼らが教え

てくれた現地語で、患者さんに用法を説明することもありました。私が言葉に詰まると、



患者さんへの服薬説明

コミュニティボランティアさんや周り
にいる患者さんが一斉に教えてくれます。説明
を受ける患者さんは、恥ずかしそうに、ある
いは可笑しそうに説明を聞き、笑顔で帰っ
ていきます。自らも避難民でありながら、地
域のため、家族のために懸命に働く彼らの姿に、
沢山の力を貰いました。彼らの想いが1日
でも早く届く事を、願っています。そして、
彼らの置かれた現状、彼らの懸命に生きる姿
を伝えていくことが、日本にいる私たちが出
来る最も重要なことだと思います。

最後になりましたが、派遣期間中、薬剤部はじめ病院の方々には大変お世話になりました。感謝申し上げます。